

ここに御紹介する2人の教授は、今秋の第10回熱測定討論会における招待講演者として来日される方である。

Loren G. Hepler 教授



1928年アメリカ合衆国、カンサス州、オタワに生れ、1950年カンサス大学化学科卒(B.S.), 1953年パークレーのカリフォルニア大学でLatimer教授指導のもとにPh.D.をうけた。1953~4年ミネソタ大学でPost doctoral Research Fellowとなる。1954

~61年、ヴァージニア大学の助教授および準教授となる。その間1957~61年にA.P.Sloan Research Fellowとなる。1961~67年、カーネギー工科大学の準教授および教授をつとめた。その間1963~4年、オーストラリアのNew England大学およびCSIROの研究員、1967~68年、Louisville大学の化学教授をつとめた後1968年より現在のカナダLethbridge大学の化学教授となった。

教授の研究分野は、溶液化学が中心であって、錯体の熱的性質の電位的研究、水溶液中の酸の熱力学がその主なものとなっている。遷移元素の化合物およびそのイオンの熱力学的性質の研究、種々のハロゲンの水溶液中の熱的挙動、水溶液中のイオンのエントロピー、酸-塩基反応の同位体効果、電極電位差、電荷移動および水素結合形成による錯体形成の熱力学、金属硫化物、水溶液の熱量測定および電気化学的研究とその対象物質も多方面におよび測定技術の開発もすすめられている。

教授は、Canadian J. Chem., J. Solution Chem., Thermochemica Actaの編集顧問であり、また、Alberta Council on Public Affairs, およびLethbridge市のJapanese Garden Societyの理事をもつとめている。教授はこのように研究以外の面で自然保護に関心が深く、また反戦・非暴力運動についても活発な文筆活動で知られている。(関集三)

Wesley W. Wendlandt 教授



今春、WendlandtのThermal Methods of Analysisの第2版がWiley/Interscienceより刊行され、私にも一冊送られてきた。10年前の初版に比べると内容が一段と充実し、最近10年間の熱分析の進歩を物語るとともに、彼の努力のあとがうかがわれる。

8月末までにもう一冊の本を書き上げたそうだが、アメリカ人らしい張り切った生活をしているようだ。彼の生い立ちと生活振りについては先に紹介したことがある(ニューズレター4, 14(1973))。そのWesが今秋の熱測定討論会にやってきて、遷移金属の配位化合物の熱的性質について、20年間の研究の成果を話してくれることになった。

7月初めのICTAの折に、ブダペストで会ったが、例によって新しいニコンを買ったといつて見せながら、東京に行ったらぜひニコンとソニーを見たいと、いかにも彼らしいことをいっていた。でき上った写真を見せてもらったことがないので、腕前の程はわからないが、数年前に同じブダペストにきたとき、フィルムの送りが外れていて全く失敗したので、同じ風景をもう一度写して帰るのだという。フィルムはアグファだというから、色が好きかと聞いたら、値段が安いからだといっていた。スライド一点張りで、オートチェンジャーの円形のホルダーに入れて書棚に並べてあることは前に紹介したことがある。

ブダペストには奥さんを連れてこなかったが、日本にはぜひ2人できたいといっていた。ただし日本のホテルのベッドに2人の身体が納まるかどうか心配である。会期の前日に来て3日間東京に滞在し、翌日東京を立ててハワイに一泊して帰国するというハードスケジュールである。忙しく振る舞うのがアメリカ式ならこれもよからう。しかし会ってみると、物静かな紳士であるから意外と思われる方もあろう。ご期待あれ(神戸博太郎)